

フランスのサッカー選手育成の現状について — 育成年代における技術，戦術指導の現状と特徴 —

松原英輝¹⁾

A Study on the Current Situation and Characteristics of the Training Program for Young Soccer Players in France: Technical and Tactical Instruction

Hideki Matsubara¹⁾

Abstract

The purpose of this study was to describe the characteristics of the French method of technical and tactical instruction for young soccer players, and to analyze the game-performance of the French young players. It would be able to serve as a reference to the review of the practical coaching method. The results were summarized as follows :

- Instruction of the fundamental technique and tactics for young players in France, makes itself concrete by referring to the principles of play
- Instruction of the principles of play based on the cultivation of an individual attitude “give the ball, then receive it” allows the transmission of the ball in the game
- Perfection of play “give the ball, then receive it” creates common ideas between the players and allows the play to be coordinated collectively

These results suggest a concrete instruction, based on the fundamental play (“give the ball, then receive it”) in all exercises. It allows individuals to adapt themselves to the collective play. It would be necessary to pursue this study.

Key words: France, soccer, training, young player, instruction

フランス，サッカー，育成，青少年，コーチング

I. はじめに

優れた若年層育成を行うためには，優れたコーチ養成が必要である。1998年ワールドカップで優勝，2006年大会で準優勝したフランスは，世界のサッカー界のなかでも先駆的に若年層選手の育成システムを組織したこと（モアン，2000）で知られる。日本サッカー協会は選手育成および指導者養成の分野で協力を得る目的で2005年にフランスサッカー協会とパートナーシップ協定を締結（財団法人日本サッカー協会技術委員会，2005），2006年からはテクニカルアドバイザーとしてInstitut National du Football（フランスナショナルサッカー学院，以下INF）元校長のクロード・デュソー氏を招聘し，若年層選手育成と指導者養成についての意見を求め，育成段階での本格的な指導に着手している。しかし，日本の育成段階での指導には，戦術と結び付かない技術指導の実態が存在し，技術と戦術

をバランスよく指導する必要性（永都・田嶋，1991），「テクニクの動作，ゲームの中でのテクニクの使い方，基本戦術の3つ」を「総合的に指導していくこと」の必要性（松原，2008），「サッカー各部分のトレーニングではなくサッカーそのもののトレーニングを行う」必要性（村松，2008）など未解決の問題が残されている。また，日本サッカーの礎を築いたと言われるドイツ人コーチ，デットマール・クラマー氏は，ボール扱いはうまいが，正確性を欠くパスや，ゲーム全体の流れを見れないなど，日本選手の欠点が30年以上前から変わっていないと指摘している（中条，1996）。これは元日本代表監督イビチャ・オシム氏が日本人選手の個人技術は素晴らしいがチームのためになっていないこと，「技術はゲームの流れの中で発揮されなければ何の意味も持たない」と述べていることと重なる（オシム，2010）。

このようにサッカー先進国から来た外国人指導者や

1) JFA アカデミー福島
JFA Academy Fukushima

海外に出た日本人指導者、研究者たちが、数十年の年月を経ながらも、日本選手の技術、戦術またはそれらの指導が総合的なパフォーマンスに結びついていないと述べる現状に対して、先進国ではゲームパフォーマンスの向上につながるより実践的なコーチング活動が行われていると考えられ、その内容を具体的に検討することは急務であると思われる。

筆者は2004年に渡仏以来、フランスサッカー協会(Fédération Française de Football, 以下FFF)公認コーチライセンス(後述するDiplôme d'Entraîneur de Football)の取得、FFFが運営するエリート選手育成機関(Pôle Espoir, 以下前育成センター)等でのコーチ研修の機会を得た。本研究では研修によって得られた知見と日仏の文献をもとに、フランスのコーチ養成課程および育成機関でのコーチングの実態と特徴を基本的技術・戦術指導を中心に明らかにし、また現INF校長のアンドレ・メレル氏による日本オリンピック代表チームの基本的なプレーの分析の視点から、育成年代に必要な総合的なパフォーマンス向上に結びつく実践的なコーチング活動とは何かを検討することを目的とした。

II. フランスの育成年代コーチ養成課程の現状と特徴

1. コーチライセンス制度の概要と育成に関わるライセンスの特徴

フランスでサッカーチームを指導するためには、FFFもしくは青少年スポーツ省公認のコーチライセンスが必要となる。コーチライセンスは、地方レベルのInitiateur 1, Initiateur 2, Animateur Senior, 続いて国家レベルのBrevet d'Etat d'Educateur Sportif du premier degré(コーチ国家ライセンス1級, 以下BEES1), Diplôme d'Entraîneur de Football(サッカーコーチライセンス, 以下DEF)の順に取得されていく。さらにDEFからはライセンスは専門化され、Diplôme de Formateur(育成コーチライセンス), Certificat d'Entraîneur Préparateur Physique(フィジカルコーチライセンス), Certificat d'Entraîneur Gardiens de But(ゴールキーパーコーチライセンス), プロチームを指導するためのDiplôme d'Entraîneur Professionnel de Football(サッカープロコーチライセンス)の4つに分かれている(FFF, 2005a)。

FFF(2010)によると、育成年代の指導に関わる各コーチライセンスの特徴は以下のようである。

Initiateur 1は6-11歳, Initiateur 2は12-15歳の地域リーグの選手を対象とするFFF公認ライセンスで、両ライセンス共に40時間の講習受講と試験によって取得できる。BEES1は、州2部リーグ以下の成人チームおよび全国リーグの青少年チーム(アマチュアクラブ)を指導対象とする青少年スポーツ省公認のライセンスで、270時間の講習受講および160時間の実地研修が課される。DEFは、3部リーグ以下の成人チームおよびプロクラブの青少年チームを指導対象とするFFF公認ライセンスで、専門課程と理論課程をともに2週間受講し、さらに1週間の試験期間から成る。また所属クラブでの指導実践も課される。Diplôme de Formateurは、FFF公認で、育成の専門家として、プロクラブ育成センターもしくはFFFの前育成センターでディレクターやコーチを務められる人材を養成することを目的とし、計8週間に渡って講習および試験が行われる。加えて所属クラブでの指導実践と他クラブでの観察研修などが課される。

2. 育成年代コーチ養成課程における技術・戦術指導の特徴

1) 技術指導

フランス育成年代のコーチ養成課程では、育成年代におけるテクニック指導の主な目標、その養成の原則および練習方法を次のように定めている。主な目標は、テクニック動作の習得により「選手とボールの関係」を洗練させること、ゲーム練習によってテクニックの使い方を学習すること、年齢が上がるにつれてポジションごとの専門テクニックを養成することである。テクニック養成の原則としては、テクニックの質、シンプルで有効なテクニック、リズムと強度を伴った反復練習、スピードとその変化、状況判断やコンビネーションプレーを伴うテクニック練習などに留意した指導が必要である。練習方法に関しては、実際のゲーム場面にもとづいたエクササイズ(exercice)で、相手を伴う、もしくは伴わない形式で行なわれる。具体的には、2人組、3人組などで行う部分的なエクササイズ、専門ポジションでのエクササイズ、ゲーム状況でのエクササイズ、ゲーム形式のエクササイズなどである(FFF, 2006)。

2) 戦術指導

フランス育成年代のコーチ養成課程では、戦術指導に関しては特にプレーの原則(Principes de jeu)のトレーニングが重要とされる。本稿ではプレーの原則とは以下の定義に基づくものとする。プレーの原則とは

表1 FFFが定める基本的なプレーの原則

基本的なプレーの原則
- 全体のバランスのよい広がり
- 動きでのボールの要求
- ボール保持者のサポート
- ブロック(チーム全体がコンパクトな集合体として動くこと)
- パス&ゴー(次のアクション)
- 2人, 3人でのプレー
- 選手と選手の間でのプレー
- 前方へのプレー
- ポジショニング, 移動, ポジションへの戻り

(Turpin, 2002より筆者作成)

FFF (2005b) によると、「共同プレーの形成に役立つ個人個人の移動や態度の一連のまとまり」または、「チームプレーにおける集団的な動き(Animation)を促進するもの」、またFrédo Garel (1977) は、プレーの原則によって「生まれる規律はどのようなシステムにも適応でき」、「各選手が同じ原則に基づいて自己表現できるので、プレーの基本を形成し、テクニックを合理的、効率的に戦術に役立つものとする」と定義している。フランスではプレーの原則は「テクニック」などと同様に一般的な用語であり、後述する前育成センターの指導においても同一の概念で使用されていると考えられる。

FFF (2007) によると、プレーの原則は社会性が芽生え出す10歳ごろから段階的に指導すべきで、10-15歳で基本的なプレーの原則を習慣化し、身体的な力強さが発達する16-20歳の育成段階では、サイドチェンジなどプレーの幅を広げるとともに、身につけた原則を洗練することが必要とされる。

プレーの原則は経験、良識(bon sens)、観察から生まれるもの(Mercier, 2006)であり、その内容を限定することは難しい。本稿ではFFFが定める育成年代で中心的に習得すべき基本的なプレーの原則(Turpin, 2002)をとり上げ、その内容を表1に示す。

Ⅲ. フランスの育成年代におけるコーチング活動の現状と特徴

ここまでFFFによるコーチ養成課程の現状と特徴について述べてきた。本章では実際の指導現場においてどのようなコーチング活動が行われているのかを明らかにするため、FFFが運営する前育成センターにおけるコーチング活動の現状と特徴をまとめる。現在同

センターはフランス全土に12カ所(INFを除く)存在する(飽田, 2010)。INFはFFFの前育成センターの1つであるが、他の12のセンターとは育成期間や試合参加の方法等異なる特徴を持つ(松原ほか, 2009, pp.251-255)ことから、本稿では両者を分けて扱う。

1. フランスサッカー協会運営の前育成センター

本項では日仏の文献に加え、FFFの2つの前育成センターで筆者が行ったアンケート調査、コーチへのインタビューおよび練習観察(Châteauroux校:2004年11月15日-20日, Vichy校:2004年12月1日-10日)をもとに、同センターにおける育成指導の現状と特徴について明らかにする。

1) 指導環境の概要

FFFの前育成センターでは、それぞれの地域の優秀な選手を集めて、将来のプロ選手の育成を目的としたトレーニングが行われている。センターは全寮制で、13歳、14歳の2年間、各学年15名ほどの選手が在籍する。練習は週に5回で、1回約1時間半行われる。指導は育成コーチライセンスを所持するコーチがFFFの指導指針に則って行う。指導内容はテクニックに50%-60%、基本戦術に30%-40%が当てられる(松原ほか, 2009, pp.252-253)。将来特色の異なるクラブに行っても通用する選手を育てるために、サッカーの基本を養成することを目的としている。Châteauroux校コーチのファブリス・デュボワ氏によると、全てのFFFの前育成センターで基本的指導プログラムは共有され、それを実践する方法に関しては各センターのコーチに委ねられるとのことである。表2にVichy校における2年間の指導プログラムの概要を示す。

2) 技術指導

両センターで行ったアンケート結果より、前育成センターの13歳、14歳では特にテクニックの習得が重要で、選手がボールを自由に扱えるようになることを目標としている。さらに、Vichy校コーチのアラン・オリエール氏は、「テクニックの洗練には終わりはなく、よりスピードを高めて行えるようにしていくこと」、また、テクニック動作の反復練習に加えてテクニックを戦術と結び付けて練習することが必要であり、味方や相手、チームの状況に応じてテクニックを適切に発揮できるようになることが大切であると述べる。

技術指導の内容に関しては、テクニック動作(リフティング、ボール運び、パス、コントロール、ヘディ

表2 Vichy校における2年間の指導プログラム

1年目 (13歳)		2年目 (14歳)	
テクニク			
リフティング, ボール運び, ドリブル, ショートパス, ロングパス, 体を使ったプレー, シュート, ヘディング, ボレーキック			
自分とボールの 関係の向上	自分とボールと相手の 関係の向上	自分とボールと味方と 相手の関係の向上	自分とチームの 関係の向上
戦術			
ポジショニング, スペースの使い方, 先に観ること, 予測したプレー, マークを外す動き, 集団での調整された動き, チームでのプレー			

(Pôle Espoir Football Vichy, 2004 より一部修正して筆者作成)

ング, ドリブル, シュート, センターリングとボレーシュート, 守備のテクニク) の反復練習, プレーの原則と組み合わせたテクニクの反復練習, ゲームを通してのテクニク練習で構成されている。

3) 戦術指導

プレーの原則を中心に指導される。練習方法としては, プレーの原則とテクニクを組み合わせた反復練習に加え, ボールポゼッションゲームやオーガナイズを工夫したゲームを通して指導される。

反復練習では, 例えば, 相手を伴わない3人組のパス交換が行われ, パスの出し方, ボールを要求する動き, サポートの動き, 3人目の動きなどが指導されていた。オーガナイズを工夫したゲームに関しては, 例えば, 横長のコートの上両ゴールライン上に複数のゴールを並べて5対5が行われ, グランドを広く使うこと, 前方へのプレー, 素早いサイドチェンジなどについて, いつ, どのように行うのかを指導されていた。

2. ナショナルサッカー学院 (INF)

本項では日仏文献に加え, 同センターで筆者が行ったコーチへのインタビューおよび練習観察 (2006-2007シーズン) をもとに, 同センターにおける指導の現状と特徴について明らかにしていく。

1) 指導環境の概要

所属選手の年齢は13歳-15歳で, 育成期間は3年である。入学時22名だった選手は毎年2名ずつ落とされて, 卒業時は18名となる。最初の2年間は週5回の練習のみが行われるが, 3年目はINFでチームを組んで年間を通したリーグ戦に参加する。

卒業生の90%-95%はプロクラブの育成センターに進み, 最終的には各学年7名ほどがプロ選手となっ

ている (松原ほか, 2009, pp.253-254)。3年間の指導プログラムの概要を表3に示す。

2) 技術指導

Merelle (1992, pp.7-40) によると, INFにおける技術指導では, テクニク動作の習得・洗練とともに, 身につけたテクニクをゲームでどのように使うのかを指導することを目的とし, その方法に関してはすべてのテクニク動作の反復練習, プレーの原則と組み合わせたテクニクの反復練習, ゲームを通してのテクニク練習が行われる。

具体的指導内容は筆者の練習観察を整理すると以下のようなものである。それぞれのテクニクは実際のゲームでのプレーを想定して指導される。例えば, 相手ディフェンダーの背後スペースへのパス場面を想定して, 山なりの軌道のロングキック練習や, ショートパス練習の際には, キックし終わった後に体勢を崩さないこと, キックからそのまま3, 4歩移動することなどが指導される。ゲーム形式の練習に関しては, 例えば10-15m四方のグリッド内での4対2のボールポゼッションゲームが行われる。この練習では相手がいる状況でのパス, コントロール, ドリブルなどが, 「動きでのボールの要求」, 「パス・アンド・ゴー」などのプレーの原則とともに指導される。またミニゲームも多く行われ, それらを通してボールキープのための体の使い方, ドリブルの使い方 (いつ, どこで, どのように) などゲームでの効果的なテクニクの使い方が指導される。また, コーチはデモンストレーションを見せたり, 細かい指導, 修正を頻繁に行っており, アンドレ・メルルコーチはインタビューにおいて「コーチは選手にただエクササイズを与えるだけではなく, どのように行うのかを指導することが大切」と

表3 ナショナルサッカー学院における3年間での段階的な指導プログラム

学年	目標	内容
1年生 (13歳)	選手とボールの 関係の向上	<ul style="list-style-type: none"> ・入学後の3カ月間に様々なボール操作のトレーニング ・インステップキックの学習 (パス, シュート, センターリング等のため) ・ミニゲーム, ボールポゼッションゲーム (主な基本戦術の指導) ・個人戦術 (動きでのボールの要求) →サポートありの1対1 (エクササイズ)
2年生 (14歳)	選手とボールと 近くの状況 (味 方, 相手) の関 係の向上	<ul style="list-style-type: none"> ・すべてのテクニックの完成に向けた洗練 ・より距離の長い, より強いプレー (サイドチェンジのパスなど) ・身につけたテクニック動作を試合で有効に発揮できるようにする ・よい視野 (よいテクニックから生まれる) → 2人, 3人でのコンビネーションプレー ・戦術→サポートありの1対1, 2対2 ワンツープラスから3人目の動き
3年生 (15歳)	選手とボールと チームの関係の 向上	<ul style="list-style-type: none"> ・より多くのゲームと戦術的シチュエーションの練習を行う ・テクニックの反復練習も継続して行う ・大人のプレーに近づける. 週末の対戦相手に合わせたプレーの仕方ではなく, 自分たちが チームとしていかに効果的にプレーするかという基本的なプレーの原則の指導

(松原, 2007より一部修正して引用)

述べている。

3) 戦術指導

Merelle (1992, pp.6-11) によると, INFにおける戦術指導の目的は, ゲーム中のプレーの選択肢があるなかでの選手の動きの質を高めることであり, 指導内容はボール保持者のサポート, 動きでのボールの要求, パス・アンド・ゴー, カバーリング, ポジショニング, スペースへの移動, 攻守におけるブロックでの動きなど基本的なプレーの原則が中心となる。

またMerelle (2007) は3年間の基本的な戦術指導プログラムに関して, 1年生で「動きでのボールの要求」や「ワンツープラス」などの個人戦術, 2年生で「オーバーラップ」, 「楔のパス-リターンパス-3人目の動き」などのグループ戦術, 3年生で攻守のコンビネーションプレーを中心とした基本的なチーム戦術を, ゲーム状況でのエクササイズやミニゲームを通して段階的に指導すると述べている。

具体的指導内容, 方法は, 筆者が行った練習観察とコーチへのインタビューを整理すると次のようである。ゲーム状況でのエクササイズの例としては, 相手をつけずに行うゴール前でのコンビネーションプレー, 対人形式での2対2の攻防, チーム全体での攻守の動き方の指導などが行われる。ミニゲームに関しては「できる限りシンプルな形式で行い, そのなかでコーチングによって選手に様々なプレーの仕方に気づかせる」(メレル氏) ことを目的とする。例えばボールを失わないためのプレー, ボール保持者のサポート, 動きでのボールの要求などである。また, 「サッ

カーの基本は1対1であり, 実際の試合と同様のプレッシャーがあるなかでプレーさせる」(メレル氏) ために, ゲームは常に数的同数で行われる。

3. フランス育成年代におけるコーチング活動の特徴

以上よりFFFの前育成センターとINFにおいては, 育成期間や試合参加方法などの指導環境面で若干の相違はあるが, 基本的指導内容は共通している。両者のコーチング活動をまとめると, サッカーの基本を養成することを目的として, テクニック動作の反復練習, テクニックとプレーの原則を組み合わせた練習 (相手を伴う, 伴わない), ゲーム練習 (ミニゲームなど), チーム戦術練習を通して基本的技術・戦術の指導が行われている。ただし, プレーの原則は技術や戦術という内容よりも, より実践的なプレーの仕方を指していると考えられる。その理由はパス・アンド・ゴーの原則に基づいたパス技術に対する具体的な指示や, いつ, どのように動くのかという戦術に対する具体的な指示など, 基本的技術・戦術は, プレーの原則を通してより実践的な内容となって指導されているからである。まさにプレーの原則は, テクニック指導と戦術指導に必要とされる指導内容として具体化されていると考えられる。

では一体この指導内容とはどのようなものであろうか。この指導内容を明らかにするために, 先述した育成年代で中心的に習得すべき基本的なプレーの原則(表1)に焦点を当て, 以下の観点に従って分類した。

まず, 選手の状況は, 一般的にゲーム中のボールを

持っている選手の動きとボールを持たない選手の動きとして分類されることが多く（グリフィンほか、1999）、表1に挙げた9つのプレーの原則を選手が置かれている状況ごと、つまりボールを出す選手と受ける選手で分類する。前者は「2人、3人でのプレー」、「前方へのプレー」、「パス・アンド・ゴー」の3つ、後者は「動きでのボールの要求」、「2人、3人でのプレー」、「前方へのプレー」、「選手と選手の間でのプレー」、「ボール保持者のサポート」、「ポジショニング、移動、ポジションへの戻り」、「ブロック」、「全体のバランスのよい広がり」の8つ、重複するものは「2人、3人でのプレー」、「前方へのプレー」の2つと考えられる。また、唯一ボールを受ける選手に関する状況として捉えなかった「パス・アンド・ゴー」に関しても、ゴーが意味することはパス後のボールを受けるためのプレーと考えられる。つまり、プレーの原則は、主にボールを持たない選手のプレーの仕方に関する指導内容であると言えるだろう。

またプレーの原則は、単純なプレー状況から複雑なプレー状況（表4）でトレーニングされるものの、それぞれの状況の中での個人のプレーの仕方に深く関連をもつ内容と言えよう。したがってチームとしてボールをつなぐ上でも個人の動きが重要であること、さらにこのような原則を獲得した個人の動きの集まりがチームプレーを成立させているものと言える。すなわちプレーの原則はどのようなチームプレーにも適応できる個人を育成する指導内容となっていると言えるだろう。

最後に、プレーの原則を原則が適用されるトレーニング状況に応じて整理した（表4）。より単純なトレーニング状況である反復練習で指導される「動きでのボールの要求」と「パス・アンド・ゴー」は、集団プレーを構成する最小単位である2人のプレーヤー間

で行われるプレーの仕方を指している。プレーの原則は主にボールを受ける選手に関するプレーの仕方であると前述したが、実際のプレー状況では、ボールを出す選手は受け手の要求に合わせたパスを送ること、ボールを受ける選手は出し手に合わせて動くことは自明のことである。すなわちこの2つの原則は、「どのようにパスを出すのか」と「どのようにパスを受けるのか」という2つの指導内容が含まれる「ボールの受け渡し」を行うための基本的な原則であると考えられる。他の原則は、関係する味方や相手の数が増えた、より複雑なプレー状況において、パスをつなぐためのプレーの仕方であると考えられる。最も複雑なトレーニング状況であるゲーム練習を通して指導される「全体のバランスのよい広がり」と「ブロック」は、チーム全体に関わる原則であり、ボール保持者と各選手が効果的にボールの受け渡しを行うためのプレーの仕方であると言える。

以上のことから、プレーの原則とはボールを出す選手とボールを受ける選手の動きを包括した、ゲーム中の様々なプレー状況に応じた「ボールの受け渡し」を行う際のプレーの仕方のことを指すと考えられる。その指導は個人の「ボールを出して、受ける」ことを連続的に行う態度の養成を基にした、ボールを有効かつ効果的につなぐための選手同士を結ぶ指導であると言えよう。

今後さらに継続的な検討が必要であるが、3つの育成機関におけるこれまでの結果から導かれるフランスの育成年代で行われているコーチング活動は、単純なテクニックの反復練習からゲーム練習まで、集団プレーに対応できる個人を育てるための「ボールを出して、受ける」というプレーの基本に基づいた具体的な指導であると言えよう。

表4 トレーニング状況に応じて整理したプレーの原則

トレーニング状況	プレーの原則
より単純なトレーニング状況	<ul style="list-style-type: none"> ・動きでのボールの要求 ・パス・アンド・ゴー ・2人、3人でのプレー ・ボール保持者のサポート ・選手と選手の間でのプレー ・前方へのプレー ・ポジショニング、移動、ポジションへの戻り ・ブロック ・全体のバランスのよい広がり
より複雑なトレーニング状況	

（表1より筆者作成）

IV. フランス育成年代のプレーの実際－日本代表チームとの比較から

本章では、多くのプロ選手を輩出したフランスナショナルサッカー学院で約30年の指導歴をもつアンドレ・メルル氏に、日本の攻撃ビルドアップ局面における課題について分析してもらい、その視点をもとに筆者がINFの同局面でのプレー分析を行った。

攻撃ビルドアップ局面としては、特にゴールキーパー（以下GK）からのショートパスで始まる攻撃のみを分析対象とした。同攻撃場面は相手のプレッシャーが比較的少なく、攻撃側にとってよりシンプルで有利な状況でプレーが再開されるため、基本的なプレーの浸透をみるためには最適であり、なおかつ海外の育成段階のチームと比較することによって日本代表チームの基本的なプレーの遂行の現状把握をたやすく行えると考えたからである。

日本チームのプレー分析は2008年7月に行われた北京オリンピックに向けた強化試合、日本対アルゼンチン戦を録画したVTR、INFは2006年シーズンの16歳以下ナショナルリーグでのINF 15歳チーム対Le Mans 16歳チーム戦の現地撮影VTRより行った。

1. アンドレ・メルル氏による日本チームのプレー分析

1試合を通じてGKから再開された16回の攻撃のうちショートパスによるビルドアップ局面は計6回（VTRより判断できなかった1回は除く）みられた。同局面で挙げられた主な課題は、「ボール保持者にサポートがない」、「パスのあとすぐにサポートに動いていない」、「（ビルドアップ局面では）まずはボールを失わないことを考えてポジショニングをとるべき」、「全体の調和のとれた動きがない」などである。特にボールを持たない選手のサポートの動きの欠如は複数場面で指摘された。これらの課題をまとめると、集団でボールキープを続けるためのボール保持者への「サポートプレーの欠如」と言える。その典型的と思われるシーンを写真1～3に示す。

日本チームは写真左方向に向かって攻撃をする青シャツと白パンツのチームである。前半20分49秒、ミッドフィルダー（以下MF）(A)がサイド・ディフェンダー（以下DF）(B)にパスする場面で、センターDF (C)はアルゼンチン選手（ア）の背後にいてパスレシーバー（B）に対してサポートのポジションにいない（写真1）。パスを受けたBは1タッチでAにリターンパス（写真2）。Bはパスのあと足を止

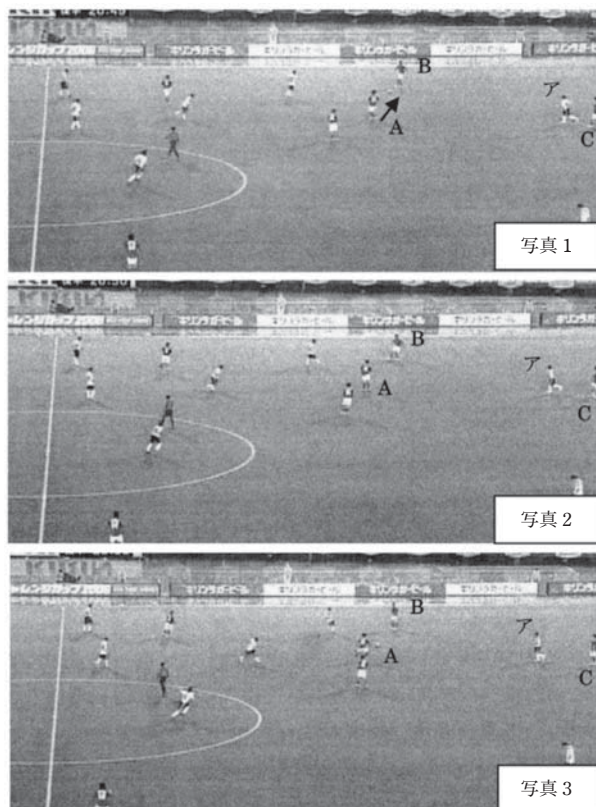


写真1～3 日本チームのプレー分析
（実線：ボールの動き）

め、Aからのリターンパスに備えたアクションがみられない。またCは先ほどと同様にレシーバーAに対してもパスコースをつくってサポートする動きはみられない（写真3）。

2. メルル氏の視点をもとにしたINFのプレー分析

筆者は、先に述べたメルル氏の視点をもとに、現地撮影されたVTR映像よりINFの15歳チームにおける攻撃ビルドアップ局面のプレー分析を行った。GKから再開された計20回の攻撃のうち、12回みられたビルドアップ局面の多くの場合において、パスを出した選手のパス・アンド・ゴーの動きを含め、ボール保持者に対してほぼ同じタイミングでの複数のサポートの動きが連続的に行われていた。典型的な場면을写真4～8に示す。

INFは写真右方向に向かって攻撃する白シャツと白パンツのチームである。センターDF (A)からMF (B)へのパスに続き、レシーバーBの周辺の選手たちがサポートの動きを行う。パサーAはパス・アンド・ゴーでBからリターンパスを受けるための動き、左サイドDF (C)は前方スペースへとパスコースを作る動き、MF (D)は後方へ下がりながらBをサポートする

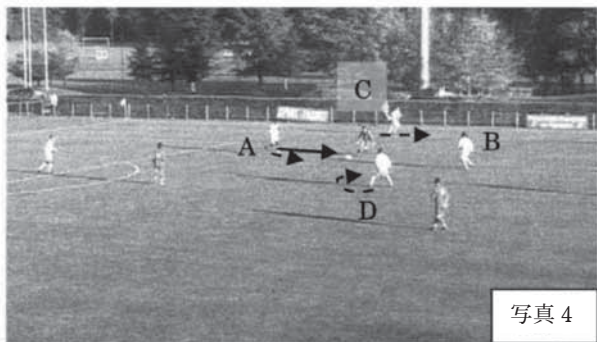


写真4

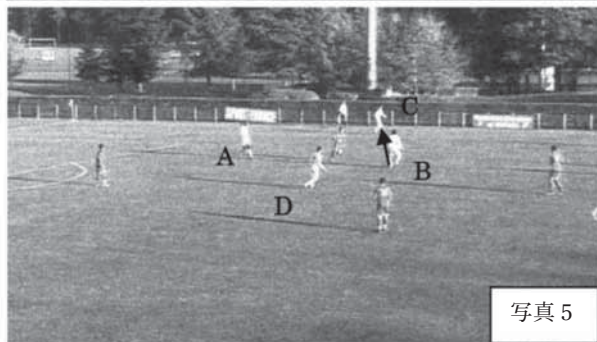


写真5

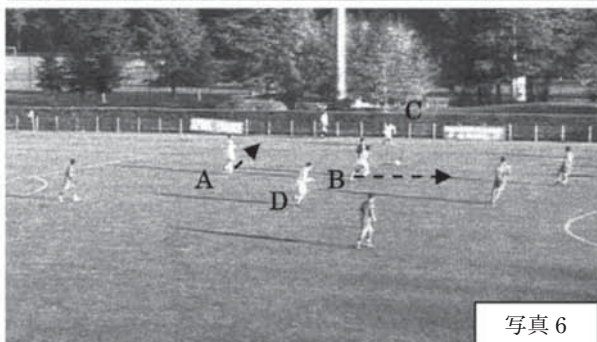


写真6

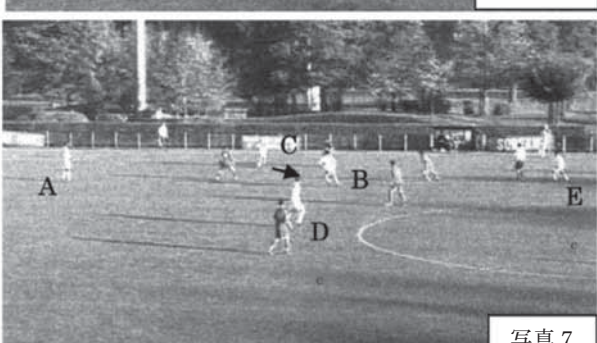


写真7

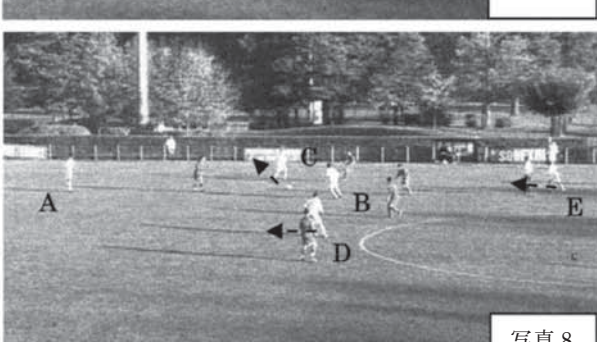


写真8

写真4-8 INFのプレー分析
(実線：ボールの動き, 破線：選手の動き)

動きを行っている(写真4)。レシーバーBは1タッチで左サイドDF(C)へパス(写真5)。Cをサポートするために、パス・アンド・ゴーで前方スペースへ動き、センターDF(A)はCの後方へとサポートの動きを行っている(写真6)。Cはコントロールの後、内側へ少しドリブルしてMF(B)へパス(写真7)。レシーバーBの周辺の選手がサポートの動きを行う。パス・アンド・ゴーでBから離れるようにバックステップで後方へ下がってサポートの動き、MF(D)は後方へ下がる動き、MF(E)はスペースへ向かってサポートの動きを開始、センターDF(A)はBからバックパスを受けられるポジションをとっている(写真8)。

3. プレー分析を通してみる育成年代に必要なコーチング活動

以上より、日本チームにおいては、INFと比べ攻撃ビルドアップ局面での連続的な「サポートプレー」が十分に行われていない傾向がみられた。サポートプレーは、フランスの育成年代で戦術の基本として指導されるプレーの原則に置き換えると、「パス・アンド・ゴー」、「動きでのボールの要求」、「ボール保持者のサポート」、「ポジショニング、移動」などの動きとなり、日本チームはこれらの動きが状況に左右されてできたり、できなかったりし、十分に習慣化されていないと考えられる。このことは、デュソーが日本の育成年代指導において基本戦術が十分に理解させられていない(島田, 2007)と述べることに合致するものと考えられる。

一方、プレーの原則を学習しているINFの選手たちにおいては、15歳ですでにパスを含めた複数選手による連続的な「ボール保持者へのサポートプレー」の動きが頻繁にみられる。さらに特徴的なのは、ボールが動くたびにその周辺の選手がほぼ同じタイミングで動き、次のパスを受けるためのポジション取りを行っていることである。これはⅢ章で述べたように、各選手が「ボールを出して、受ける」という基本的なプレーを共有することで、ボール保持者のパス動作を予測、理解でき、自らがパス・アンド・ゴーを行うようにパスに合わせて動き、「動きでのボールの要求」を行った結果であると考えられる。この基本的なプレーの習熟、共有が、選手間に共通理解を生み、調和のとれた集団プレーを可能にしていると言えるだろう。

以上をまとめると、メレル氏が指摘したボール保持

者のサポートプレーは決して強豪国だけが可能な高度な戦術ではなく、育成年代で習熟できる基本的なプレーである。ただし、サッカーの集団プレーとは90分間選手と選手をつなぐ有機的な個人個人の移動と態度のひとまとまりであり、調和のとれた集団プレーを行うためには、それに対応できる個人の育成、つまり、「ボールを出して、受ける」という基本的なプレーに習熟した個人の育成が必要不可欠であると言える。

V. おわりに

本研究では、フランス育成年代における技術、戦術指導の特徴と日本チームおよびINFのプレー分析から、育成年代における実践的なコーチング活動について検討した。本研究の結果をまとめると以下の通りである。

- ・フランスの育成年代の練習内容は、テクニック動作の反復練習、テクニックとプレーの原則を組み合わせた練習（相手を伴う、伴わない）、ゲーム練習（ミニゲームなど）、チーム戦術練習が行われ、それらを通して基本的技術・戦術の指導が行われている。そして、これらの指導は、プレーの原則を学習する手立てとしてテクニックと戦術に具体化されている。
- ・プレーの原則の指導は、「ボールを出して、受ける」ことを連続的に行う個人の態度の養成を基にした、ゲームでボールをつなぐための指導である。
- ・「ボールを出して、受ける」という基本的なプレーの習熟、共有が、選手間にプレーの共通理解を生み、調和のとれた集団プレーを可能にしている。
- ・上述したプレーは決して強豪国だけが可能な高度な戦術ではなく、育成年代で習熟できる基本的なプレーである。

すなわち、育成年代のコーチング活動では、集団プレーに対応できる個人を育成するために、単純なテクニックの反復練習からゲーム練習まで、ゲームを想定した「ボールを出して、受ける」というプレーの原則に基づいた、具体的で実践的な指導が必要であると言える。本研究結果は3つの育成機関における限られた期間での調査内容に基づいており、今後さらに継続的な検討が必要であるが、日本におけるより実践的な指導法を再考する際の一つの知見を提示できるものと言えよう。

文 献

- 鮑田 敏 (2010) 海外研修報告・フランス. 財団法人日本サッカー協会技術委員会監 テクニカル・ニュースVol.37. 財団法人日本サッカー協会: 東京, pp.10-14.
- Turpin, B. (2002) Préparation et Entraînement du Footballeur-Tome1-. Editions Amphora: Paris, pp. 132-134.
- Fédération Française de Football (2005a) Documentation du Brevet d'Etat d'Eduteur Sportif du premier degré (BEES1研修配布資料)
- Fédération Française de Football (2005b) Les principes de jeu (BEES1研修配布資料)
- Fédération Française de Football (2006) Formation Technique (育成コーチライセンス研修配布資料)
- Fédération Française de Football (2007) Principes de jeu (育成コーチライセンス研修配布資料)
- Garel, F. (1977) Football: Technique-Jeu-Entraînement-. Editions Amphora S.A.: Paris, pp.182-198.
- J・P・モアン (2000) フランス代表ビッグタイトル連取の理由. 中村敏雄編 現代スポーツ評論, 3. 創文企画: 東京, pp.91-103.
- Fédération Française de Football (2010) :Diplômes et formations continues. http://www.fff.fr/dtn/formation/educateurs/diplomes_formations_cont/
- グリフィン・L・リンダほか: 高橋健夫ほか訳 (1999) ボール運動の指導プログラム—楽しい戦術学習の進め方—. 大修館書店: 東京, pp.9-11.
- イビチャ・オシム (2010) 考えよ!—なぜ日本人はリスクを冒さないのか?—一角川書店: 東京, p.5
- 松原英輝 (2007) INFにおけるU-15年代のトレーニング第2回. サッカークリニック. ベースボール・マガジン社: 東京, 14 (10) : 91-95.
- 松原英輝 (2008) INFにおけるU-15年代のトレーニング最終回. サッカークリニック. ベースボール・マガジン社: 東京, 15 (4) : 90.
- 松原英輝, 入口 豊, 吉田雅之, 吉田康成 (2009) フランスのサッカー選手育成の現状について—育成年代における一貫指導体制の現状と特徴—. 大阪教育大学紀要第IV部門, 57 : 241-258.
- Merelle, A (1992) Première promotion. In: Damiano, C. (Ed) La Préformation à l'INF (13-15 ans). Fédération Française de Football: Paris, pp.13-40
- Merelle, A. (2007) L'Institut National du Football de Clairefontaine. pp.9-10 (指導者講習会配布資料)
- Mercier, J. (2006) Football: Comprendre et pratiquer. Editions Amphora: Paris, p.131
- 村松尚登 (2008) バルサ流トレーニングメソッド. アスペクト: 東京, p.190.
- 永都久典・田嶋幸三 (1991) サッカーの指導者及び指導内容に関する比較研究—旧西ドイツと日本について—. 城西大学研究年報 自然科学編, 15 : 47-62.
- 中条一雄 (1996) Jリーグ・筋金入りレポート—まだまだ日本には未来がある. 恩人クラマーさんに聞く—. 週刊朝日. 朝日新聞出版: 東京, 101 (23) : pp.138-139.
- Pôle Espoir Football Vichy (2004) Document de fonctionnement

(コーチ研修配布資料)
財団法人日本サッカー協会技術委員会監 (2005) テクニカル・
ニュース Vol.10. 財団法人日本サッカー協会：東京, p.50.
島田信幸 (2007) JFAアカデミー福島. 財団法人日本サッカー

協会技術委員会監 テクニカル・ニュース Vol.22. 財団法人
日本サッカー協会：東京, p.28.

平成22年8月23日受付

平成23年3月1日受理